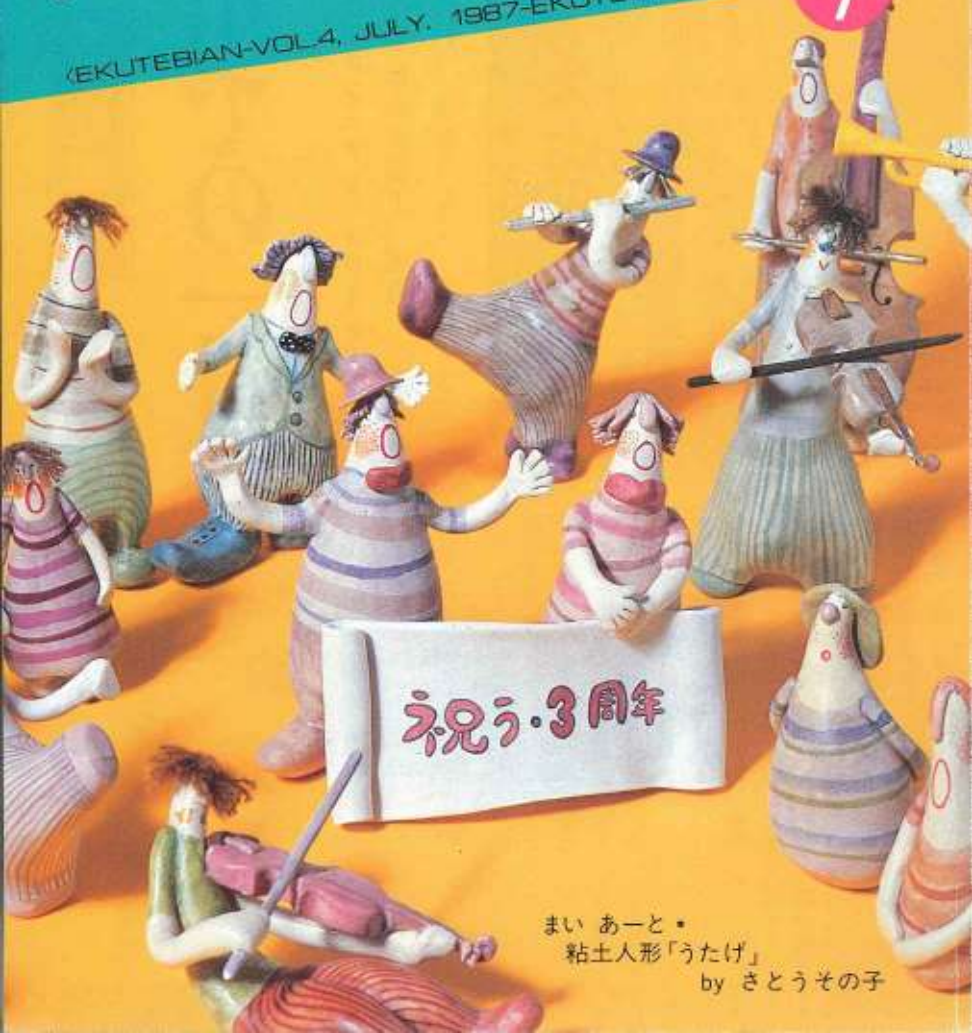
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
7
〈EKUTEBIAN-VOL.4, JULY. 1987-EKUTEBIAN〉
祝う・3周年
まい あーと・
粘土人形「うたげ」
by さとうその子

ガリバー誕生

「遠くを見る人」の除幕式から

一段高い所から眺めているのは、はるか立川か、それとも未来。

原作者スイフトの言葉の刻まれたプレートがガリバーの台に付く。

スイフトの故郷のアイルランド大使がはるばる式典に訪れた。

作者の赤川政由さん。ガリバー製作のために大航海時代を探りにスペインにまで足をのばした。

あのガリバーが、遠く滋賀県は高島郡高島町に現われた。身長7メートルという巨人の作者が、これまたなんと立川人・赤川政由さん（高松町、彫刻家）であった。1年以上を費やした赤川作品が、5月24日の“ガリバー青少年旅行村”開村式にアイルランド大使をはじめ、多くの来賓、報道陣に囲まれて披露された。世界の人々にゆめを囁くガリバー氏、「遠くを観る人」の眼差しは案外、立川のあなたを見つめているのかも……。

常陸宮殿下・妃殿下

「立川での一日」

クリーン多摩川ご視察

5月31日、ゴミゼロフェアー「クリーン多摩川」が行われた。二十年来続いている行事に今年は、常陸宮殿下、妃殿下が立川を初めて訪問され、市民の清掃の様子を視察された。「街を美しく、自然を大切に」の立川市民の心意気が伝わった。

手に手にゴミ袋を持った立川市民が多摩川に集合した。恒例となった「クリーン多摩川」の清掃が晴天の下で行われた。年ごとに参加人数が増える中、今年は常陸宮殿下、妃殿下が立川を訪問され「クリーン多摩川」をご視察なさった。

実行委員長の三田鶴吉氏の説明をお聞きになり、拾ったゴミを手にした市民にねぎらいの言葉をかけられた。この日初めて立川を訪問された宮さまは常に笑顔を絶やされなかった。宮さまがお通りになると整列した市民から大きな拍手がおこり、笑顔で心からの歓迎の意を表した。暖かな拍手に送られて宮さまは式典の行われる立川駅ビル「ウィル」に向かわれた。

「ウィル」ではゴミゼロフェアー「クリーン多摩川」の式典が行なわれ、またチャリティーオークション、昼食会と行われる中、日本鳥類保護連盟の写真展と当日開催されていた本誌天野武男氏の写真展「ダッカのほのかな光」をご覧になられた。

午前中にご到着されてから分刻みのスケジュールの中でも常に笑顔を絶やすことのない常陸宮殿下、妃殿下に温厚なお人がらがよく表われていた。

立川市民も初めての宮さまのお越しにおしみのない拍手がいたる所でおこり、宮さまを歓迎した。

ゴミのない、笑顔の人々の住む街という印象を常陸宮殿下、妃殿下はお受けになられたに違いない。

たちかわ伝言板

第3回　立川北口

氷彫刻まつり

立川北口大通りに　今年も
氷の彫刻がやってきます！
ひとときの涼を
お楽しみ下さい！

7/5（日）　午後1時より
―雨天の場合は、7/12（日）―

立川のモニュメント

❻ 大山道しるべ〔道標〕

雨乞いの神、大山阿夫利神社へ行く道しるべとして、安政四年（1857年）建てられる。なお、近くにある大山団地は、この「大山道」から由来している。

丹沢山塊にある大山は「雨を降らせる」神の山といわれている。江戸時代、その大山にある大山阿夫利神社に、関東一円から多勢の人が参詣に訪れたという。

この大山詣での道を大山道と呼ぶが、立川砂川三番近く、五日市街道から南へのびる道も、また「大山道」なのである。

大山信仰は、講が組織されたおかげで、急激に広まっていったというが、この道もそうした人々が、相模の国をめざして歩いて行ったのだろうか。

その参詣の道も、現代はクルマが我がもの顔に通る。「大山道しるべ　安政四丁巳年」と刻まれた道標も、街道際に立っていたためか、クルマに引っかけられ、ポッキリ二つに折れてしまった。

100kgもある石の道標だが、今では地面に寝かされて、そのまま空をにらんでいる。

（H・H）

漢字テスト⑱

空欄に一字押入を試みよ。

肝胆相□
百依□順

表紙は語る

ワイワイガヤガヤと楽しげな表情の人形の作者は高松町のさとうその子さん。どこかで見たことがあるという人もいるかもしれないが、さとうさんの作品は今、小学校の音楽の教科書の表紙も飾っている。

「朝起きるでしょう。それで雨が降ってたら、今日は洗たくしなくていいな。とか天気だったら、今日は自転車に乗ったら気持ちいいぞ。とか楽しい事を考えるんです。きっと他の人だったら雨が降ったらやだなと思うだろうけど私はなるべく良い事だけを頭に浮かべるんです。」と言う。楽天家というわけではないがどんな状況の中でも自分の気持を前向きにする術を持っている。

以前は幼いお子さんをモデルに人形を作っていたこともあったが、お子さんの成長とともにモチーフが人間全般に移り作風の変化で深みが増して来た。

「歌を唄う人形を作る時は、上手に唄おうね、と言いながら作るんです。」そんなさとうさんの思いが人形に込められて、人形の一体一体に生命が宿ってゆく。のびのびとした発想そのものが人形に表れてくる理由でもある。人形にさとうさんの心が映る。

真如苑だより

天から降ってくる雨は大地をうるおし、活力をあたえ、そして今や燃え盛る「夏」を迎えようとしています。

真如苑では今月も皆様のおこしをお待ちしております。お気軽においでください。

■日時　7月18日(土)　午後2時〜4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■立川市民（成人）に限らせて頂きます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

漢字テスト・答

肝胆相照
百依百順

工房から

●大上段に構えることはないんですが、今号は本誌創刊三周年記念号であります。アッという間の三年間でした。創刊当時の取材を思い出します。「えくてびあんから来ました」と申し上げても、何処かのバーのツケがまわってきたかと勘違いされて取り合って頂けないナサケナサ。●おもえば遙ばるやって来たものです。月並みな御礼ですが、読者の皆さまのご支援あればこそでございます。多謝。●天野武男・バングラデシュ写真展の折、義援金などの募集は一切していなかったにもかかわらず、酒井亮さん（高松町）をはじめとして多くの方々から「お志」をお預かりいたしました。早速、ユニセフへお持ちしました。●仏法僧　青雲杉に　えくてびあん。

（編集）石塚敦美　大野玲子　神山清子　隅川理
田中恵子　原田礼子　半沢正弘　東畠弘子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田薫治
スタジオ269

月刊えくてびあん　第36号
昭和六十二年七月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)0082
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社 立川印刷所

ANOKO-KAWAIYA

立川

看板娘

あのこ可愛いや看板娘。歌にまでなったあの『看板娘』たちは、どこへ行ってしまったのでしょうか。歌の主人公たちはたしかにお歳を召したかもしれないが二代目、三代目の『看板娘』たちは、今日を盛りと咲いております。それも、彼女たちの存在は「煙草屋」に限ったことではありません。たとえば百貨店の受付嬢の愛くるしさに、つい足がむいてしまうものでございます。『街に咲く花』をあなた、ご存じありません？

新連載

渡辺真澄さん
立川高島屋（曙町）

顧客係の中で一番のベテラン。かってミス立川で入賞しただけに応対も品よくスマート。

羽金玲子さん
立川消防署（高松局）

消防署にも女性はおります。広報活動の最前線で大活躍。男性隊員にも負けませぬぞ。

森光桂子さん
串揚割烹トントン（柴崎町）

皆んなから「トントンちゃん」と親しまれている。飾らぬ愛らしさは子パンダくん以上かな。

木村公美子さん
麺の店「賓來」（錦町）

ただでさえ美味いラーメンが公美子さんの笑顔で出されると倍は美味く感じる。不思議。